

令和7年度 自己点検・自己評価表

大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園

1. 本学の建学の精神

“桃李不言下自成蹊” とおりものいわざれどしたおのずからこみちをなす

「成蹊」の名称は、中国の司馬遷の『史記』に由来しています。「桃や李^{すもも}は何も言わないが、その美しい花や実^はにひかれて人が集まってくるので木の下には自然と小道（蹊）ができる」という意味であり、徳が高く、尊敬される人物のもとには徳を慕って人々が集まってくるというたとえ。

2. 本園の教育目標

強く 明るく 考える子ども

3歳児 喜んで 幼稚園へ来る子ども

4歳児 友だちと なかよく遊べる子ども

5歳児 力いっぱい 遊びやしごとをする子ども

3. 今年度重点的に取り組む目標

1. 教育活動

① 幼児の立場から

幼児が自分らしく、生き生きとして日々を過ごし、自己充実できるよう努める。

そのためには、まず、日々の生活の中での幼児の実態を見つめ、何が課題と考えられるのか、また保育をする上で何が求められているのかを見極めていく。さらに、幼稚園教育の基本である環境構成を考え、どの幼児にも分かりやすい・使いやすい等の優しい環境であることに重点をおく。幼児と共に生活を創り出す保育実践に努めていく。

② 教職員の立場から

幼児が安心して思う存分に遊べる安全で豊かな環境構成に努め、幼児の主体性が育まれていく保育の教材や遊具を幼児の実態を把握し準備していく。更には、一人ひとりの幼児がもっている個性や発達の特性を見極め、教員間の連携を密にし、情報共有や共通理解しながらその幼児に合った指導を行うことを基本とする。各クラス週案をもとに日々の保育活動を行う。引続き、「運動あそびカリキュラム」に沿って環境構成を意識して取り組み、改善を加える。新たに「造形あそび」の研究に取組み、保育活動を充実していく。

2. 教員研修

① 園内研修

園全体で保育活動の課題を共有し、必要なテーマについて、園内研修を行う。2年目となる研究テーマの「造形あそび」については、昨年度に引き続き、各クラスの実態から素材を選択し、保育活動を行っていく。「こどもてんらんかん」につなげていくようにする。「運動あそび」は、年間カリキュラムのもと、教員間で協議を深め、サーキット運動を中心に実践を行う。系統的に運動能力の育成を図る。公開保育を行い、大学や短期大学の教員の指導・助言をもらい保育の質を高め教員の資質の向上を図る。

② 教育課程、指導計画の見直し

幼稚園教育要領の趣旨を理解し、趣旨を踏まえた視点から年3回、教育課程・指導計画を見直し、改訂を行い、実践していく。

3. 大学・短大との連携

学部、学科との交流をより活発にしながら、各々の専門性を保育に取り入れ、幼児・保護者・教員の豊かな学びに繋げていく。また、教育学部幼児教育コースと幼児教育学科の教員と協力した「保育研究会」を実施し、幼児理解をより深めると共に、公開保育を実施し、よりよい保育を追求する。高校、大学の体験学習、大学、短大の教育実習生を受け入れ、次への保育者を育成する。課内活動・課外活動において大学・短大の教員が講師を務める。大学教育学部幼児教育コースのPBL授業に協力する。

4. 安全管理

アルコール消毒、うがい、手洗いを引続き行い、安心・安全な保育を第一とする。保育室や遊具等の園内施設の安全点検を定期的に行い、安全意識を高めて幼児の安全確保に努める。また、1ヶ月毎に避難訓練を行い、保護者との共通理解や連携を深め、いざという時には冷静にすべての幼児の命を守れる体制をつくっていく。大雨による河川の氾濫等の水害の際には、近隣小学校への避難の協力を引続き依頼し、訓練を行う。

4. 評価項目の達成及び取り組み状況

(評価結果はABCの3段階評価としています)

評価項目	結果	取組状況
教育活動 ① 学園の建学の精神や、園の教育目標を踏まえ、幼児が主体的に、生き生きと充実して生活できるような保育の創造と実践に努める。 I ② 幼児の発達や育ちの姿を適切に読み取り、どの幼児も安心して遊べる、一人ひとりに寄り添った関わりや環境構成を考える。	A	取組内容 行事については、予定通り実施できた。園での宿泊保育も3年目となった。参観については、学年で二日間実施し、親子で活動を行う内容を取り入れた。引続き、安心・安全な保育を第一とし、消毒・手洗い・うがいは継続して行い感染防止に心がけてきた。インフルエンザで学級休業があった。運動会は、満3歳児クラスの園児も参加することができた。「こどもてんらんかい」では、平素の造形あそびの活動を作品発表につなげることができた。生活発表会は、音楽発表は、外部講師の指導があり、劇の発表は、発達段階に応じた内容を担任が工夫し9クラスを二日間に分けて実施した。春の親子遠足、秋の遠足も実施することができた。「インスタグラム」を継続し、ホームページでのWEB日記を含め、積極的に情報発信を行った。保護者と園との連絡方法に、かねてからのICT化支援WEBシステムを活用する事で、経費の節約、事務効率化を図った 今後の課題 行事は、昨年度と同様に実施していくが、状況の変化に応じて変更を検討していく。 ICT化支援WEBシステムを有効に活用していく。「インスタグラム」の投稿の役割分担が必要である。 具体的な取組方法 毎日の保育は、週案、日案をもとに子ども達が主体的に取り組める工夫ある保育活動を行っていく。各保育室の壁面飾りを子どもが製作し季節感を大切にしていく。講師を招いた園内研修の実施や園外研修にも積極的に参加し、園全体の保育の質を高めていく。2年目になった「造形あそび」の引続き研究を進め、公開保育を行い、教員相互の力量を高めていく。平素より計画的な保育を行い、特に大きな行事については、しっかりしたねらいのもと時間のゆとりをもちながら活動を行っていく。 ICT化支援WEBシステム「Brain」の有効活用を行い、保育研究に取り組む時間の確保を図っていく。あわせて「働き方改革」を意識し、充実した働き方になるように「チームこみち」を意識し、風通しのよい職場環境づくりを図っていく。主任会議を行い、教員の思いを反映し、よりよい園運営につなげられるようにする。業務改善を常に意識し、できるだけ早く退勤できるように意識して業務に取り組む。 「インスタグラム」を活用して、本園の保育の質の高さを発信し、保護者の信頼を深めていく。 取組内容 満3歳児クラスの保育を6月より開始した。身支度や集団生活の中でのルールなどが、遊びの中で身につくようていねいな保育を行った。すべての子どもに対して、一人ひとりの興味や関心を捉えながら、主体的に取り組めるようにその年齢に合った素材や遊具等の準備をしていった。週案を立て学年で保育内容の共通理解や子どもの実態についての情報交換を行ってきた。「造形あそび」は、昨年度に引き続き、各クラスの子どもの実態にあった素材で活動を行ってきた。個別に支援を必要とする幼児に対しても、教員間での連携を細やかにとり、望ましい支援の方法を考えることができた。また、幼児教育学科の教員や大阪市私立幼稚園連合会から派遣された臨床心理士の園児観察からアドバイスをもらえた。すべての幼児に分かりやすく、扱いやすい視覚支援などユニバーサルデザインの掲示物や備品を活用することができた。昨年に引続き、音楽を通じて子ども同士がつながる力を育成するねらいをもって、8クラスで短大教員と「ミュージックコミュニケーション」の活動を行った。新たに音付け絵本の読み聞かせを担当が行うことができるよう、園内研修を行った。また、子ども達がさまざまな運動遊びに取り組めるように環境を整え、自主的な外遊びを促した。 今後の課題 幼児一人ひとりの育ちを読み取る力をつけていくために、研修を受講し、短大教員等の指導を仰ぐことで、教員間の共通理解を図り、日常の保育に活かせる力量が必要。個別の支援を必要とする園児の保護者との相互理解を深めていく。3年目となる「造形あそび」

			の研究の方向性を定める必要がある。「ミュージックコミュニケーション」の活動を補助教諭と担任が連携して、実施していく。音付け絵本の読み聞かせにも取り組む。 時間外勤務を可能な限り少なくしていく。 具体的な取組方法 週案に沿って、学年で共通理解のもと保育活動を行っていく。「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の振り返りを行うことで、幼児の主体性が育まれる保育を実践していく意識を高める。短大教員や大阪市特別支援教育相談事業での臨床心理士からの見立てから適切な支援方法を学び、共通理解していく。各クラスにおいて、「ミュージックコミュニケーション」の活動を行い、すべての担任が日常の保育に取り込んでいく。学年や園全体で保育活動の相互交流を行い、経験豊富な教員から若い世代へ経験値を伝えていく。園内研修の充実や園外研修にも積極的に参加し、自ら学ぶ姿勢を高めていく。時間外勤務については、学年主任のマネージメント能力を高め、効率的に業務をすすめる。
II	教員研修 ① 園内研修の充実 研究テーマの視点から、幼児の姿を捉え、実践事例研修として協議を行い、幼児理解を深めていく。 ② 教育課程・指導計画の見直し、新幼稚園教育要領を踏まえ、これまでの教育課程と指導計画を改訂する。	A	取組内容 2年目となる「造形あそび」について、各クラスの子どもの実態にあった素材を選んで活動を行い、月に1回の研究会議を開催し、活動方法や「保育研究会」の進め方について検討した。11月には、大学、短大教員に各クラスの「造形あそび」の活動を公開し、その後「保育研究会」を行い、示唆をもらった。 大阪市私立幼稚園連合会や大阪府教育庁が主催する研修講座に可能な限り参加をすすめ、対面研修やWeb研修等で参加することができた。 今後の課題 まとめの年度の3年目となる「造形あそび」の活動について、どのような素材で研究を行っていくのか、何をを目指すのかを明確にしていける必要がある。 受講した外部研修の園全体への還元を行う時間設定ができていない。時間の確保が必要である。 具体的な取組方法 「造形あそび」については、研究会議において、共通理解を進めながら、8月には、大学教員を講師に迎え園内研修を実施する。11月には、公開保育を引続き実施する。 ミュージックコミュニケーションについて、共同の研究クラスを2クラスとし、その他のクラスについては、補助教諭と連携して、音付け絵本の読み聞かせを行い、普段の保育の中で取組める力量をつけていく。 取組内容 各学年のこども像を共通理解し、各期ごとに幼児の実態と内容を照らし合わせ、より幼児の生活に添った保育を行った。週案をもとにしながら振り返りを行い、日々保育の改善や指導計画に手直しを行った。年長児は、小学校への接続を意識し、小学校で必要な力を共通理解しながら保育活動の中に盛り込んできた。大学の教室において、小学校の模擬授業を行った。 今後の課題 引続き、安心・安全で充実した保育を継続していくかが課題となる。保護者の理解を得ながら、教育課程、指導計画の見直しが必要となると考えられるが、できるだけこれまでの実施してきた行事を行えるように検討していく。 また、就学前教育と小学校との連携、接続については、近隣小学校と交流が行えるように積極的に働きかけていきたい。 具体的な取組方法 教育課程の見直しは、年3回の教育課程会議の中で、検討していく。 また、行事については、余裕をもって、計画し実行していく。不測の事態にも対応できるようにしていく。 運動会やこどもてんらんかいにおいては、大人の参観の人数制限は設けず、学年参観は、1日で設定していく。年長の宿泊保育は、園で行う事としていく。 年長児の小学校との交流活動については、引続き実施していく。教員の小学校への運動会見学も引続き実施していく。

III	大学・短大との連携 大阪成蹊大学、短期大学との連携を強め、保育についてじっくりと話し合い、幼児教育に対する考え方を共有する。	A	取組内容 学部や学科の教員との「保育研究会」を今年度も公開保育を含み、実施することができた。 正規の保育活動や課外保育の時間に、大学や短大の教員や学生と連携し、さまざまな活動を工夫し行ってきた。(英語チャレンジ・ミュージックコミュニケーション・スポーツ指導・アトリエ活動) 教育学部幼児教育コースでは、園見学、体験活動、「PBL授業」に協力し学生の学びを深めることができた。 年長児が芸術学部の学生と交流し、一つの作品を作成し、「九度山芸術祭」に出品した。また、「こども二科展」に応募し、2名が入選した。 今後の課題 次年度も引続き、大学・短大教員の多くが参加できる体制で「保育研究会」を実施する。第2保育期には、公開保育も行う。教育学部のPBL授業への協力も引き続き行う。 また、教育実習以外でも学生が幼稚園現場を経験できる機会を設定していく ex: 保育補助アルバイトや行事の補助 具体的な取組方法 短大や大学との連携をさらに深めながら、保育活動の充実を図る。「保育研究会」を実施し、公開保育を行う。また、併設校や短大・大学の学生の教育実習、体験学習を受け入れることでよりよい保育者になるための指導を担っていく。また園行事への学生参加の機会や保育補助の機会をさらに増やしていく。 芸術学部の授業として「こどもてんらんかい」の展示内容を組み込んでいく
IV	安全管理 教職員が協力・連携をして、幼児の安全を守る体制を強化する。また、保護者と共に連携体制を再確認し、すべての幼児の命を守るという意識を高めていく。	A	取組内容 毎月の安全点検を実施し、避難訓練に関する年間計画を立て、教員と幼児・保護者も共に様々な状況を想定してほぼ1ヶ月に1回の訓練に取り組んできた。消防署からは、消防車も出動し、避難訓練や教職員の消火訓練を行った、救急救命研修も実施した。大水想定の際隣小学校へ避難する訓練については、実際に小学校の協力を得て避難する訓練を行うことができた。 園児引き渡し訓練を昨年度に引き続き実施した。 今年度は、警察との連携での交通安全教室を実施し、歩行練習を実施した。 今後の課題 大地震など大災害発生時に、園内で幼児が長時間待機する事になった場合の備蓄品(食料品・衣服・衛生用品など)の点検を行い、管理場所や物品の選定なども教員全体で共通理解を行う。次年度も、日程調整を行い、警察や消防署と連携して訓練を実施していく。 具体的な取組方法 安心・安全な園体制を構築していく。大きな災害を想定した避難訓練はもちろんのこと、毎月1回の避難訓練を継続して実施し、教職員の意識を高め、常に幼児の安全確保を最優先する体制の再構築を図る。施設や遊具・保育室の環境の安全点検を行い、事故のない安全な環境を設定していく。養護教諭からの指導を通じて、感染症の予防、健康や食への意識を高め、ケガや事故を予防するとともに、マニュアルを熟知し、事象が起きた時に、迅速に対応できるよう教員の意識や行動の向上を図っていく。

5. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

1. アルコール消毒、手洗い、うがい等の感染防止対策は、引続き保育活動の中で行ってきた。年間計画や行事予定の検討を行い、秋の遠足は、昨年度と変わらず、電車利用の混雑の時間帯をさけて、実施することができた。参観は、各学年とも2日間設定し、ゆったりと子ども達の活動を参観できるようにした。子ども達は、保育活動に意欲的に取り組む姿があった。年齢に応じた育ちの獲得をねらいとして、常に子どもの実態を把握し、保育に工夫と改善を重ね取り組んできた。
2. 「造形あそび」を研究テーマとして2年目となり、各クラスの子どもの実態に合わせた素材で主体的な活動を行った。夏期園内研修では、講師の大学准教授から「土粘土」についての講義と体験研修を行った。11月に公開保育を行い、短大・大学教員から示唆をもらい、次年度の研究につなげていくことができた。教員研修においては、私立幼稚園団体の研究や大阪市教委や府教委の研究に可能な限り参加し学びを深めた。年々増える個別の支援が必要な子どもに適切な支援が行えるように、短大教員や大阪市私立幼稚園連合会からの派遣臨床心理士の園児観察を通じての助言や研修による学びによって個々の教員のスキルアップにつながっていった。
3. 幼稚園、短大、大学が互いの立場で連携し、保育の実践、学びの両面から専門性を深め、より良い保育、より良い保育者育成につながる取組を行ってきた。「保育研究会」を実施し、大学や短大教員が、園児の実際の姿を共有できる機会を設けることができ、学びを深めることができた。さらに、教員間の連携だけでなく、学部・学科の学生が子ども理解を得られる機会のための教育実習や体験活動の機会を提供し、学生の学びを支援した。また、教育学部のPBL授業は、有意義なものであった。新たに芸術学部の学生や教員との活動を行うことができた。
運動会やもちつきの行事においては、学生のボランティアが活躍し学生アルバイトが日常の保育補助を担っている。今後とも学生が、幼稚園現場を知る機会を増やしていく。
4. 安全管理については、年間計画にそって火災や自然災害に備えた訓練を実施した。警察署や消防署と連携し、交通安全教室や避難訓練を行った。また、ケガや感染症を含む病気の予防と対策について養護教諭を中心に保護者への発信を行い、園児への予防教育を行った。今年度も津波や大雨等の想定で東井高野小学校への避難訓練を行うことができた。
5. 新たに満3歳児クラスの保育を行い、遊びの中で、身支度や集団生活の中でのルールなどが身につくように保育の工夫を行い、運動会や生活発表会にも参加することができた。

6. 学校関係者の評価

評価委員・幼稚園教員（園長・教頭・教務担当・研究担当）出席のもと、各学期ごとに年3回学校関係者評価委員会を行なった。委員会では「教育活動について」「園内研究や研修について」「学園や諸機関との連携」等を柱に、スライドショーを提示しながら、幼稚園から幼児や保護者の様子、教職員の取り組みの経過と成果及び課題の報告を行った。その後、評価委員より意見や助言をいただくなど、評議の場を設けた。

今年度も総合的評価としては概ね良好であり、今後一層の保育内容の充実を期待する旨の意見を得た。主として以下の内容が挙げられた。

1. 教育活動について

今年度も幼児一人ひとりの個性を大切に、主体的に生き生きと生活できるような保育をめざし、質の高い保育を展開することができた。子どもたちが、社会性の育成や集団生活をする上で必要なことを学ぶことができる保育であった。日案、週案をもとに保育を行っているが、子どもたちの興味や関心、願いを大切にし、子どもを主体とした保育になるよう、子どもの気づきやアイデアを共に喜び、褒めながら遊びや行事につなげることができている。一人ひとりに寄り添う保育は、平素の教職員の情報交換や教員同士の日々の連携、「チームこみち」が、よりよい業務の遂行につながっている。

また、関係機関や学外の専門職と連携し、特別な支援を必要とする子ども一人ひとりに適切な対応や支援を行うことができている。

このような教育・保育活動を展開していることで、保護者の信頼と感謝につながっていると考える。

2. 教員研修について

教員研修については、園で統一した研究課題に取り組んでおり、研究テーマ「造形あそび」について、2年目となり、月1回の研究会議と11月開催の公開保育で着実に保育力が深められている。公開保育においては、終了後の保育研究会において、大学・短大の教員の助言を実践に還元している点は高く評価される。

「ミュージックコミュニケーション」の取組については、教員自身が実践し、新たな学びを得ることで、子どもに還元されている。

教育課程においても、保育期ごとに見直しを行い、子どもや園の実態にあった保育に改善を行っている。

また、外部研修にも積極的に参加し、つねに教員自身が、保育力の向上に努力し、研修の成果を共通理解している。今後も知識を広げ、質の高い保育や子どもへの柔軟な対応が行えるようになってもらいたい。

3. 大学・短大との連携

附属という強みが最大限に活かされており、保育研究会や公開保育を軸に、教員の保育力が高められる取組があり、英語・ミュージックコミュニケーション・スポーツ・アトリエなど大学・短大の専門性を保育へ取り入れており、子どもたちにとって豊かな保育が提供できている。

併設校や教育学部、短大幼児教育学科の学生たちの園見学、体験活動、教育実習、PBL授業等の受入れが、進路希望やよりよい保育者の育成につながっており、共によりよい保育者を育てようとする姿勢がある。

新たに芸術学部との学生にも学びの機会が提供され、子どもとの活動の中から「九度山芸術祭」への出品を行うことができた。また、芸術学部の教員との連携で「こども二科展」に出品し、入選者が2名あったのは、大変喜ばしい。

4. 安全管理

いつ災害が発生するかわからない今日、人命が第一、常に安全な保育ができる体制を設定し、迅速に対応できる行動が重要である。また、危機意識を持つことが大切である。そのために、毎月の安全点検と避難訓練を計画的に継続して実施しており、消防署・警察署・近隣小学校と連携した実践的な訓練も行っている。年少児も避難訓練の際は、大変落ち着いて行動できており、日頃の継続的な取組の成果と思われる。

今後は、園が課題としている大規模災害時の長時間待機に向けた備蓄品の点検・選定とその管理方法について教職員全体で共通理解しておくことが一層の体制強化につながる。

5. その他

つねに、笑顔でのあいさつがあり、子どもを安心して預けられる温かい雰囲気がある。教育目標のもと、安全への配慮を土台に主体的な保育を着実に積み重ねてきている。また、これまでの研究や研究で得られた学びを園全体で蓄積・継承していく仕組みづくりやその取組を支えるための業務全体の見直しを行っている。さらに大学、短大と協働して保育の質を高めていくことを希望する。